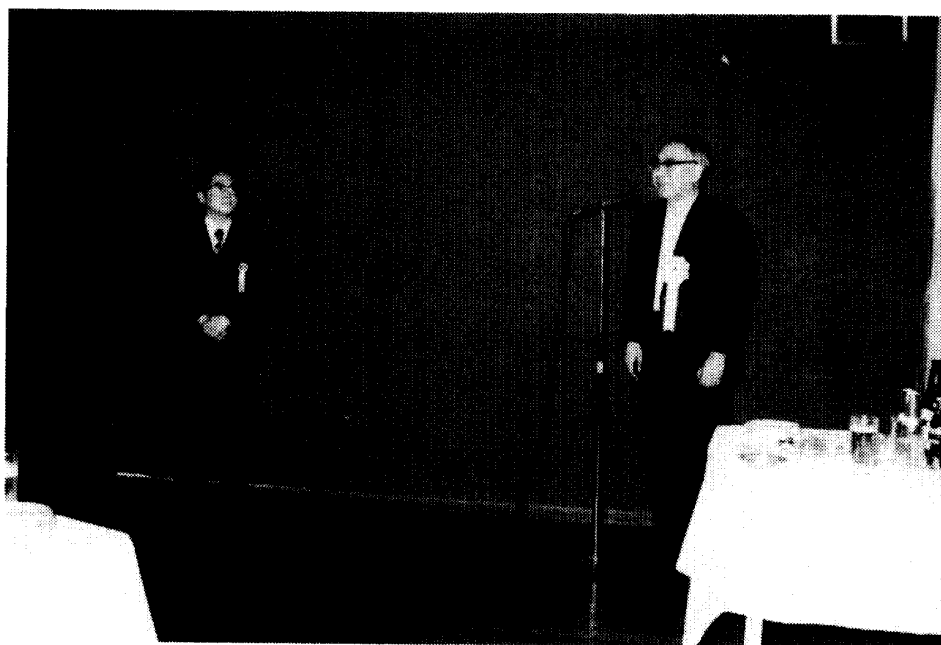




Title	<追悼記>木村彰一教授と北大のスラブ研究
Author(s)	外川, 継男
Citation	スラブ研究, 33
Issue Date	1986
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5159
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113261.pdf



[Instructions for use](#)



「スラブ研究施設20周年」及び「木村・矢田両教授還暦記念会」における木村彰一教授
(1975年)



ワルワラ・ブブノーヴァ作
「スラヴ学者 木村彰一像」 1955年



1974年7月撮影

外川継男 出かず子 平井友義 百瀬宏 伊東孝之 南塚信吾 福岡星児
鳥山成人 木村彰一 齊藤孝 木戸蒞 (敬称略)

木村彰一教授と北大のスラブ研究

外 川 継 男

本年1月18日午後4時45分、東京神田駿河台の日大病院で木村彰一教授が急逝された。原因は心不全であり、年齢は71歳になられたばかりであった。

木村教授は当日神田の学士会館でラテン語の辞書の編集をしておられたが、突然の発作に倒られ、救急車で日大病院に運ばれたが、そのままついに不帰の客となられた。

ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、生前の木村先生を偲んで一文を捧げる次第である。

誰もが知るように、木村教授はわが国のスラブ学の創始者の一人であり、研究者としても教育者としても巨大な足跡を残された。木村教授は北海道大学文学部にロシア文学科が、法学部にスラブ研究施設が設立されるに当たって中心的な役割を果たされたばかりか、その後東京大学に移られてからは教養学部の教養学科にロシア分科を、さらに文学部にロシア語ロシア文学科とその大学院の修士・博士過程を設立された。おそらく一人の学者がこのように五つものスラブ関係の教育・研究機関を創設する上で主導的な役割を果たすということは過去にもなかったし、多分これからもありえないことであろう。

学会の上では、「日本ロシア文学会」の会長をつとめられ、国内のみならず国際的にも活躍され著名であった。

今後おそらく何人もの人によって、研究者および教育者としての木村教授について、しかるべき文章が書かれることであろう。以下において筆者は、木村教授が四半世紀の長きにわたって関与された北大の「スラブ研究施設」との関係に限って記すこととする。これは初代スラブ研究施設長であられた木村教授への追悼という意味にとどまらず、先生の御逝去を機会に北大のスラブ研究の来し方行く末を考えるよすがにしたいと思うからである。

*

* *

木村彰一教授が東京外事専門学校の教授から、敗戦後新設された北大法文学部のロシア語・ロシア文学担当の助教授として赴任されたのは1947（昭和22）年7月1日付のことであり、このとき木村助教授は未だ32歳であった。このあと1956（昭和31）年1月31日付で北大を退職されるまで、木村先生は8年半にわたって北大に勤務されたわけであるが、北大退職後もひきつづき「スラブ研究施設」の研究員としてつとめられた。しかもそれは施設が「スラブ研究センター」に改組される1978（昭和53）年3月31日までの二十余年の長期間にわたるものであった。

北大に赴任されて6年後の1953（昭和28）年7月16日から翌年8月27日まで、木村教授はロックフェラー財団のフェローとしてアメリカに留学された。これは同財団が北海

道大学にソ連東欧関係の研究機関を設立する助力をしようとの意向と無関係ではなく、ロックフェラー財団は翌1954年にも「スラヴ研究室」のメンバーたる東京女子大の岩間徹教授をもコロンビア大学に、また1960年には筆者をカリフォルニア大学（バークレー）に留学するフェローシップを与えた。木村教授はアメリカでは主にハーヴァード大学でローマン・ヤコブソン教授を指導教官として研究され、その主たる成果は後に『イーゴリ軍記』やプーシキン研究となって結実する。

一方ロックフェラー財団は、このとき木村教授にハーヴァードやコロンビアの「ロシア研究センター」や「ロシア研究所」をも視察して、将来北大に出来るであろう同種機関のモデルにすべく研究してもらいたかったらしい。しかし、この点筆者の見るところでは、木村教授は「地域研究」としてのソ連・東欧研究についてはいささか懐疑的であり、これをもってプロジェクトを作って予算を獲得する手段として考えておられたようである。

ところで本稿を執筆するに際して、筆者が調べたところ、ロックフェラー財団の名前が初めて出て来るのは、木村教授のアメリカ留学の二年前の1951（昭和26）年3月6日付の『北海道大学新聞』の記事である。このとき来日中のダレス特使団に文化関係の随員として加わっていたロックフェラー三世が、北大の島善鄰学長と会見し、「北大を北方文化のセンター」とするため援助することを約束し、さらに同財団の人文科学部長のチャールズ・フェーズ博士が松田図書館長とこの件に関して「細目について」協議したことが報じられている。

「スラヴ研究施設」の設立にあたってロックフェラー財団が財政的に援助したのみか、とくにフェーズ博士が献身的に協力されたことは、故岩間教授が「フェーズ博士のこと」（『スラヴ研究』No. 20）と題する一文のなかでも書いておられる。岩間教授の回想するところによると、この年（1951年）の夏、当時富士見高原に別荘を借りて仕事をされていた氏のもとに、わざわざ木村教授が訪ねて来られて、夜を徹して語り合ったが、それは北大に「スラヴ研究所」を設立するために岩間教授にも是非協力してもらいたいとの目的からであったという。

しかしこのとき「北方文化のセンター」という新聞の書き方には、ソ連・東欧研究とは別に、北大に以前からあった「北方文化研究室」の研究所昇格という意味とも無関係ではなかったらしい。北大には戦前から北東アジアの諸民族に関する人類学や民俗学の研究の伝統があり、児玉、犬飼、高倉、名取、知里、大場といった著名な研究者が名をつらねていた。しかしロックフェラー財団はこのような「北方文化」よりも、「地域研究」としてのソ連・東欧研究機関がわが国の大学には一つもないことを知って、国立大学中ロシア文学科を有する唯一の大学である北大に目をつけたというのが真相だったと思われる。

かつて筆者は「スラヴ研究施設二十年の歩み」（『スラヴ研究』No. 20）と題する一文を草するに当たって、創設当時のいきさつを木村教授や鳥山成人教授にうかがったことがあった。そしてこのときお二人の口から、施設の設立に当たって島学長のあとを継いだ杉野目学長と並んで、当時法学部におられた尾形典男教授が大きな役割を果たされたことを聞いた。そこで早速1975（昭和50）年1月22日に尾形邸にうかがって、教授自身から次のようなお話をうかがうことができた。

それは木村教授がアメリカへ留学する一、二年以前のことである。尾形教授は東大と京大の二人の教授とともにアメリカにおける「地域研究」の実状を視察するため渡米したが、帰りの船の上で、将来東大はアメリカ研究を、京大は中国・アジア研究を、そして北大はソ連・東欧研究をそれぞれ分担してやるという「希望というか夢」を語り合ったとのことであった。さらにこの時尾形教授は、将来の北大のスラブ研究の目的として、個人的意見だがと前置きされた上で、「歴史研究を中心として、スラブ諸国の文化や思想様式の本質を研究し、ひいては何故にロシアで革命が起こり、それが一応の成功を見たかを理解すること」にあったと筆者に話された。

このあと1953(昭和28)年6月24日付で、官制にもとづかぬ学内共同研究機関として「スラヴ研究室」が北大に設立されたが、すでにそこには文学部門(木村教授、北垣信行助教授、金子幸彦一橋大学講師)、と歴史部門(鳥山助教授と岩間東京女子大学教授)のほか、経済部門(内海庫一郎教授)、政治部門(猪木正道京都大学教授)、国際関係部門(江口朴郎東京大学教授)といった社会科学の諸部門も加えられて、はっきり「地域研究」の色彩が打ち出されていた。そしてこの「スラヴ研究室」の主任に木村教授が任命されたのは、アメリカ留学に出発されたあとの8月1日のことであった。

しかるにこの「スラヴ研究室」の性格と組織について、この年2月1日付の『北海道大学新聞』には以下のような極めて興味ある記事が掲載されているので、煩瑣を厭わず全文をここに紹介することにする。

「文学部ではかねてから露文科の木村助教授(実は前年12月6日付で教授に昇任している——筆者)、史学科の鳥山助教授らを中心に東ヨーロッパの研究をすすめる計画が立てられていたが、このほどアメリカのロックフェラー財団の援助によって文学部内にスラヴ研究所が設置されるはこびとなった(傍点筆者)。

ロ財団からは約五百万円に相当する学術図書、文献などが寄贈され、更に政府より施設費として三百万円の予算を要求し来る四月一日より発足する見込である。

最近駐留軍、保安隊などにおけるソ連のさかんな軍事研究が噂されている折から、地理的にソヴェトロシアの研究であり、そのためにアメリカの財団の援助のできるスラヴ研究所にたいしてはかつての中国研究所や大東亜研究所のような反動的な役割をはたすのではないかと懸念するむきもある。

研究所の構想として鳥山助教授は次のように語った。

従来西欧に比べて劣っていた東欧についての学問的水準を高めるため言語学、文献学、歴史学、文学など広い範囲にわたり基礎的な研究をすすめてゆくが専任の研究者をおかずそれぞれの分野から研究に参加する。

研究は対象が学問的なものであって保安隊などの軍事的、戦略的研究とは全く関係ない。」

つまり、「スラヴ研究室」が発足する半年足らず前に考えられていた構想では、(1)研究の目的は言語学、文献学、歴史学、文学など、いわゆる「スラヴ学」(Slavistik, slavistique)であって、軍事研究や戦略的研究とは全く関係ないものであること。(2)研究は広範囲にわたるが基礎的なものであること、言葉を代えていえば、インターディシプリナリーな学

術的研究であること。(3) 文学部に附属し四月一日から発足の予定だが、研究所に専任の研究員はおかず、各部局、各機関に研究員を委嘱する計画であることが、ここには記されている。

しかるに「スラブ研究室」が国立学校設置法にもとづかぬ学内の共同研究組織として発足するのは前述の如く、4月1日ではなく、この年6月24日付のことであり、その運営はもっぱら科学研究費補助金(130万円—但しこの年度の科研費の総額は約1億5千万円であった)でまかなわれた。共同研究としては「ロシアおよびソビエト社会における中間層の役割に関する研究——第一期ナロードニキ関係」がテーマに選ばれ、木村教授の留守を預った鳥山助教授や山本敏助手が実際上の中心となって行われ始めた。

このようにして発足した「スラブ研究室」は、二年後の1955(昭和30)年7月1日に官制化されて、正式に「スラブ研究施設」として国立大学の一機関として認置された。しかし、このとき認められたのは経済部門の助教授1、助手1にすぎなかった。しかも制度上、研究施設はいずれかの学部か研究所に附置されなければならず、本来なら木村教授や鳥山助教授の在籍する文学部に置かれるべきであったが、実際には研究員のいない法学部に附属するところとなった。従来その理由として、当時文学部はいわゆる「藤井事件」を抱えており、新設の「スラブ研究施設」など引受ける余裕などなかったと説明されてきたが、現在筆者はこれに対して疑問を抱いている。というのは、文学部に「第一次藤井教授問題」が発生したのは翌1956(昭和31)年6月のことだからである。むしろ事實は、このようにして生まれた「スラブ研究施設」が、先の北大新聞が報じたようなアメリカの財団の援助の下に出来た研究機関である上に、さらに既存の「北方文化研究室」とも微妙な関係にあることを憂慮して、当時の文学部が引受けることを躊躇したというのが真相だったように思われる。それに加えて、「地域研究」の先駆けをなすソ連・東欧研究機関を北大に設置することについては、すでに尾形教授が島学長および法学部教授会の内諾を取りつけていたという事情もあった。「尾形天皇」と渾名された氏が仲介となって島学長やその後の杉野目学長を動かした結果、新しく出来た「スラブ研究施設」は形式的には法学部に属するが、法学部には一切迷惑をかけず、学部長選挙にも加わらなければ、法学部の教授会にも参加しないという紳士協定が出来たのであった。

この年10月21日付の『北海道大学新聞』は「スラブ研究施設」の誕生を次のように簡単に報じている。

「『スラブ研究室』は、去る七月一日付で研究所(実は研究施設——筆者)に昇格したが、このほど教養部第三講堂裏に独立の校舎を持つことになった。

山本同研究所講師談

この研究所は、これまで我が国で非常におくれている、ロシアソヴィエトを中心とするスラブ民族諸国を研究するために作られたもので、日本でも最初のものと思います。これからは『Area Study』の方法を採入れて、全国の専門の学者の連携の下に研究を進めて行くつもりです。」

ここに、「スラブ研究施設」が Slawistik の研究機関というより Slavic area studies の研究機関たることが、初めて登場してくる。事実第二次大戦後アメリカで急速に発達し

た「地域研究」においては、ソ連・東欧を中心とするスラブ地域の研究——Slavic studies——が主導的役割を果たしており、このような気運のなかで1955（昭和30）年に北大に「スラブ研究施設」が誕生したのであった。

木村教授はこのようにして生まれた「スラブ研究施設」の初代施設長に任命され、同時に文学部教授と法学部教授を兼任した。新設の「スラブ研究施設」には文学部から鳥山助教授と経済学部から、山本講師が移られ、創設期の種々の雑用をこなされた。

「スラブ研究施設」の命名の由来に関しては、鳥山教授の退官パーティーの折に次のような逸話が紹介された。研究施設の設立にあたって、「ソ連研究施設」と「ロシア研究施設」の二つがあげられたが、当時の社会的風潮からすると、前者はともすれば親ソ的であり、後者は反ソ的なニュアンスをもつものとして受けとられる可能性があった。そこで言葉としては政治的色彩のまったくない「スラブ研究施設」に落ち着いたというのである。

しかしこれにはプラスとマイナスの双方がある。プラスはソ連や東ヨーロッパの研究者との交流という点で、これがたいへんよい名称だということである。事実彼らの多くは、もしこの研究所が「ソ連・東欧研究所」という名前だったら、自分の所属する大学や研究所はここを訪れることを許可しないであろう。なぜならそれはソ連・東欧に関する外交政策や軍事を研究したり、スパイを養成するところと見なされるからであるという。一方、マイナスというのは、「スラブ研究」というのは本来フィロロジやフォークロアが中心であるのに、過去にも現在にも専任のメンバーでこの分野の専門家が一人もいないという事実である。またスラブ圏といいながらソ連（ロシア）とポーランド以外はまったく手薄だからである。

本来フィロロジストであった木村教授は、アメリカ流の政策科学的なソ連・東欧研究には一貫して批判的であった。しかし新しく設立された「スラブ研究施設」の年二回定期的に行なわれる研究員会議においては、研究も予算も人事も、まったくイデオロギーに左右されることなく、あくまでも学術的な基礎に立脚して行なわれた。当時の日本の学会で、右の猪木教授と左の江口教授とが同じ宿舎に泊り、同じ釜の飯を食って議論を戦わせた後、同じ温泉につかって文字通り裸でつき合うといった光景は、北大の「スラブ研究施設」以外、いかなる大学でも考えられぬところであったろう。この「スラブ研究施設」のイデオロギーに左右されぬ、アカデミックでリベラルな研究こそ木村教授や鳥山教授が築かれた伝統であったといつてよい。

しかし木村教授は「スラブ研究施設」が設立されたわずか半年後の1956（昭和31）年1月31日付で、九年間勤務された北大を退職され、東京へ移られることになった。

*

* *

木村教授は北大文学部では1952年12月以来教授の地位にあったが、東大文学部の言語科が用意したポストは助教授であった。このため木村教授はいったん文部教官を自己都合で退職して、新たに東大に採用される形をとられた。北大の他の学部では、時として北大教授から東大助教授に降格となって移る例があるが、木村教授はこのようなやり方はとられなかった。

しかし北大教授を辞任したとはいえ、木村教授はその後23年間にわたって、「スラブ研究施設」が「スラブ研究センター」となって独立するまで研究員でありつづけられた。

「スラブ研究施設」は毎年二回、主に夏は札幌で、冬は東京ないし首都圏で研究員会議を開催してきたが、そこにおいて木村教授が報告された研究テーマは以下の如くである。

- 1954年 7月 アメリカにおけるスラヴ研究の現状について
- 1957年 1月 『イーゴリ軍記』について
- 1957年 12月 ベリンスキーのタチアーナ観
- 1959年 6月 パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』について
- 1960年 10月 N. S. レスコフについて
- 1963年 1月 アンジェイエフスキの作品について
- 1966年 11月 アブラム・テルツの社会主義リアリズム論について
- 1969年 11月 1966年2月の文学裁判について
- 1974年 7月 『青鍋の騎士』の解釈をめぐって
- 1977年 6月 偶感

この最後のテーマは、「スラブ研究施設」がセンターに改組されるに当って、こちらからお願いして四半世紀に及ぶ思い出を話していただいたものであった。

このほかにも「スラブ研究施設」はいわゆる大学紛争以後、より開かれた研究をめざして学生や職員のみならず一般市民をも対象に公開講演会を開催したが、そこにおいても木村教授は以下の如き講演を引受けて下さった。

- 1969年 7月 スラヴの使徒キリールの業績について
- 1971年 7月 晩年のトルストイ
- 1975年 7月 プーシキン雑感

この最後の講演の7月15日には、北大のクラーク会館において「スラブ研究施設創立20周年祝賀会」と、あわせて「木村彰一・矢田俊隆両教授還暦祝賀会」が盛大に開かれた。今村成和学長や小暮得雄法学部長より心のこもった祝詞が寄せられ、スラブ研究施設の今後の発展と両教授のますますの御活躍を祈って乾杯が重ねられた。

木村教授が研究員として出席された最後の研究員会議は、1978（昭和53）年2月の東京本郷の学士会館における会議であった。その第二日の2月8日の午後6時から、今度は場所を変えて神田の学士会館で「スラブ研究施設」のお別れパーティーが開かれた。奇しくも木村教授が倒られた同じ場所で、木村教授をはじめ、江口、金子、岩間、百瀬宏、日南田静真、斉藤孝、望月喜市、南塚信吾、宮島直機といった北大外の新旧研究員に、矢田、五十嵐清、鳥山、福岡星児教授ら北大の兼任研究員を加えて、まことに楽しい一夕をもつことができた。すでに4月1日から法学部所属の「スラブ研究施設」は独立した「スラブ研究センター」になることが決定しており、25年に及ぶ「スラブ研究施設」の歴史を回顧しつつ、新しい「センター」への期待が語られた。

「スラブ研究施設」は1957年以来現在にいたるまで機関誌『スラヴ研究』を発行してきた。木村教授はその第1号から1979年の第24号まで七回にわたって『イーゴリ遠征譚

木村彰一教授と北大のスラブ研究

一訳及び注』を連載されたが、これは木村教授の主要業績の一つである。しかし本文よりもはるかに注が多く、しかもいろいろな言語の活字を必要とするこの『イーゴリ遠征譚』の印刷は、正直なところ印刷屋と編集者泣かせといった面もなかったわけではない。しかしいまやわれわれは、この木村教授の業績を『スラブ研究』に連載し終ったことを多少とも誇りにしている。なぜなら、このような面倒な原稿を採算を無視して出版するところのほかにはないからである。このあと木村教授は近年岩井憲幸氏と共訳の形で『コンスタンティノス一代記』と『メトディオス一代記』をも『スラブ研究』の第31号以下に連載された。そして今回本誌に掲載されている『メトディオス一代記』が木村教授の最後のお仕事となられた。

*

* *

「スラブ研究センター」の設立により、それまでの学外研究員はすべて交代され、木村教授も『スラブ研究』に寄稿されるほかセンターと直接関係を持たれることはなくなった。しかしその後も平均して二年に一度は北大の文学部に集中講義に来られ、『イーゴリ軍記』や『エフゲーニ・オネーギン』やオストロフスキーの『雷雨』の演習を行なわれた。

木村教授は昨年は九月の下旬に北大に集中講義に来られた。いつものように灰谷氏の肝煎りで木村教授を囲んで9月24日の夕べにロシア語・ロシア文学の人たちと楽しい飲談のひとときを持つことができたが、私にとってはこれが木村教授とお話することのできた最後の機会となった。たまたま私の前に席を取られた木村教授は、全員がそろりまでの時間を使われて、最近の「スラブ研究センター」が本来のスラブ学からますます遠去かり、ソビエト政治や国際関係に重点が移ってきたことをさびしげに語り、ひとこと「これも時勢ですか」とつぶやかれたことが強く印象に残っている。

(Jan. 25, 1986)